

中学校の鑑賞教育を考える

4. 下中記念財団によるビデオ教材『雅楽』②

第二期 全4巻

尚美学園大学教授 石澤 眞紀夫

「太平楽」(第7巻)

きらびやかな鎧兜を身に付け、鉦を持って赤を中心とした装束の4人によって舞われる「太平楽」は、左方の武の舞楽である。したがって、伴奏は唐楽でなされる。曲の由来は「漢の高祖と楚の項羽が覇上で宴を開いた時、項羽の臣項荘が高祖の暗殺を企て、剣を抜き舞って機会をうかがった。それを察した項羽の季父項白も、また剣を抜き、ともに舞いながら袖で防ぎ、高祖を守った」という故事に因んで作られたいわれている。音楽は、太食調で、舞人の登場の道行きに「朝小子」、細かい拍子の破に「武昌楽」、破より拍節が早い急の「合歡塩」の三曲をセット(一具)にして構成されている。

映像は、太食調「調子」笙の主管が吹き始めた後に助管が次々と加わる形の退吹から、箏篋へと移り、龍笛が「音取」を吹き鞆鼓を打ち合わせるころまでを前奏として、道行きの音楽に乗って舞台奥左側から鉦を持った舞人が4人一列になって登場する。舞台では中央に鉦を置き2人づつ左右に分かれ、両手を伸ばし、足を踏み締め、シンメトリな動きを含みながら端正に舞う。破は、鉦を持って舞う現行の舞楽の中では最も長いといわれている。ひとしきり舞った後、中央に置いてある鉦を持ち舞い続ける。やがて、音楽は活発でありながら、4人の舞人は向き合い鉦を立てて動きの少ない振りを含み変化をつけた表現をなした後、4人は背中を合わせ鉦を四方に向ける形を作ってから中央に向き、鉦を床において静かに終わる。急は、管弦の笛の音から

始まる。鉦を置いたまま4人は遠心に向かって両手を差し上げダイナミックに舞い、やがて、剣を抜き、振りかざして舞う。音楽も高揚し、大太鼓の連続して打ち出すリズムの強調。腰をかがめ剣を納め、重吹から鉦を取り列を整え静かに一人ずつ退場する。宮内庁楽部で省略無しで演じられるのは、この映像だけとのこと。(47分)

「催馬楽—伊勢海・更衣」(第8巻)

「催馬楽」は、各地の農民が貢ぎ物や租税を都に運ぶ時に歌った民謡を、宮廷の貴族たちが雅楽風に管弦の伴奏をつけて表現したもので、平安中期に流行した歌曲である。語源としては、①交通の手段としての馬をかり催す時に歌った、②巻頭の詞に「いで我が駒早く行きこせ」と馬を催す内容があるから、③大嘗会で神馬を曳く時に歌われたから、などの説がある。

「伊勢海」、高舞台上で16人の楽師により管弦と同じスタイルで演奏される。律の音階、平調を基音として歌われるので、まず平調音取りを奏する。次に、笏が打たれ「イセノウミ」と独唱され、斉唱が続く。歌の意味は「伊勢の海の汚れのない美しい渚で、潮が引いている間に、なのりそ(海藻のホンダワラの古称)を摘もう、貝を拾おうよ、玉を拾おうよ」。

「更衣」(ころもがえ)、前と同様に笏拍子が打たれるところから始まる。独唱、管弦伴奏による斉唱と続く。歌の意味は、「衣替えをしましょうよ。サ、公達や(貴族の師弟に対する呼び掛け)、私の衣は、野原や篠原に生える萩の花を摺ったものですよ。サ、公達や」である。一般には、夏

服や冬服に改めることを「衣替え～更衣」というが、この歌では萩の花刷りの衣を自賛したものと解釈されている。(19分)

「朗詠一嘉辰・紅葉」(第9巻)

「朗詠」は、漢詩に節をつけて歌うもので、旋律の形を付けたのは源雅信と伝えられる。独唱と斉唱を繰り返す。斉唱では、笙・篳篥・竜笛の3管が伴奏をする。藤原公任の「和漢朗詠集」(漢詩文の一節と和歌とを採録したもの、1013・長和2年頃成立)が知られている。「催馬楽」と同様に平安貴族に親しまれた声楽曲。起源は奈良時代からの詩の披講(作品の読み上げ)での読み上げによるとされ、それはまた、仏教の法要や儀式で読誦される「偈」(ゲ)ー意味は「歌われるべきもの」 Sanskrit 語 *geyarja* の音写で、韻文体の詞を指すーとも深く関わっているとされる。

「嘉辰」唐代・衛の詩人謝偃の作、朗詠では、音高が規定されていない。この映像では、壹越調で歌われるのでその音取りのあと、演奏される。和漢朗詠集では祝いの句とされる。

嘉辰令月歆無極(かしんれいげつ かんむきよく) 万歳千秋楽未央(ばんぜいせんしゅう らくびおう)

これを3回繰り返し、各句に少しずつ変化を付けて歌われる。音読み。

「紅葉」源道済の作。『新選朗詠集』平安後期の藤原基俊選には「秋大井河逍遥」として収録。

紅葉亦紅葉 連峰ノ嵐浅深(こうようまたこうよう れんぼうのあらしせんしん)

蘆花亦蘆花 斜岸ノ雪遠近(ろかまたろか しゃがんのゆきえんきん)

三つの句に分けられ、各句は独唱から斉唱というパターンで歌われる。一の句は「紅葉亦紅葉」(独唱)「連峰ノ嵐浅深」(斉唱)まで。二の句は「蘆花亦」(独唱)「蘆花」(斉唱)まで。三の句は「斜岸ノ」(独唱)「雪遠近」(斉唱)。

この朗詠での表現の特色は、一の句の終わりの低音から、二の句の独唱が急に甲高

い音、高音になるので大変難しいことである。次に言う言葉が出ないことを「二の句が出ない、継げない」というのは、これに由来している。(16分)

「資料編2ー雅楽の装束と着装」(第10巻)

内容はナレーターによって進行される。雅楽の装束は、大きく分けると日本古来の国風歌舞、外来の芸能を源流とする様々な舞楽、管弦で着用するものと三つの装束に分けられる。国風歌舞の装束は、雅楽という芸能のためのものではなく宮中での故実にとつた装束を使用する。「東遊」は、武官の装いである舞人装束と、文官の装いである歌方装束とがある。また、演奏される季節によって夏・冬の区別がある。それぞれの冠の相違について映像で確認しながら、細かい説明がなされている。以下、ここで活用されている呼び方や名称は現在の宮内庁楽部で使用されているものであり、専門用語が多用されている。「東遊」の舞人の着装から、「久米舞」の舞人、武官姿の着装と、段階を追って一つ一つ丁寧になされる。舞楽での、①襲(かさね)装束の唐装束は、舞楽の大半である左右の平舞で使用。左方では紅や赤を、右方では緑、青を多く使っている。中国唐代の装束に源を発するという。②蜜絵装束は古の官人の制服に由来するという。蜜絵は鳥獣草花を円形に描いた文様。③別装束は、その曲目だけに用いる装束。④童舞い(迦陵頻や胡蝶)の四種があることを古図によって説明する。続いて、襲装束の着装の例を右方舞楽「延喜楽」の装束で、次に、西域の民族の面影を伝えるという面をかぶる「抜頭」の襦袢(りょうとう)装束。さらに、「太平楽」の甲冑装束と、それぞれの例できめ細かく示される。最後は、管弦の装束と着装。(104分) 解説は固いが詳細。全4巻¥88,000

「生ける正倉院」とも称される貴重な文化遺産「雅楽」。宮内庁楽部の現行伝承を多角的にとらえたこの映像の内容をしっかりと咀嚼して、わが国の伝統音楽の価値、よさを教育の場でしっかり伝えたいと思う。